

名古屋市立緑高等学校

父と暮らせば

作：井上 ひさし

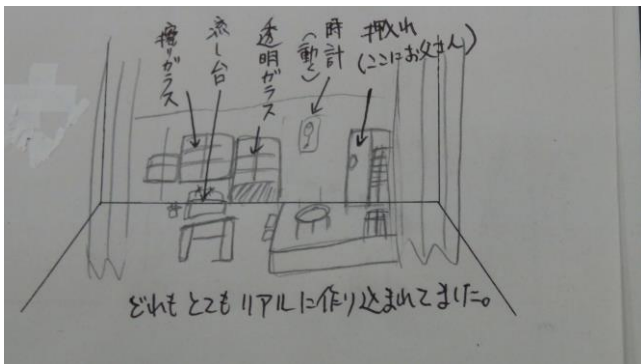
◇概要◇

『うちはしあわせになってはいけんのじゃ』

愛する者たちを原爆で失った美津江は、人生の喜びから身を引こうとしている。そんな娘の恋を、何とか応援しようとする父、竹造。

日常をいとも簡単に破壊してしまう戦争と、少しずつ日々の生活を取り戻す娘の心の再生の物語。

1994年にこまつ座が初演、以来、再演を重ねる井上ひさしさんの代表作。



◇メッセージカードより◇

- ・大道具はやはり圧巻で、キャストの技量も努力のたまものだと感じました。“日常的”な会話だったので心にくるものがありました。
- ・方言がしっかりと口に馴染んでいて話し方が自然でした。お父さんの怒っている時の迫力が凄かったです。
- ・本当にドラマを見ているかのような感じでした。また、父の娘への愛のこもった怒り、とても心に刺さりました。
- ・今じゃ戦争の残酷さが分からないけど、この劇を通して知ることが出来ました。2人と少ない役者の数で演じられていてすごいなあと思いました。

◇楽屋インタビュー◇

Q1. 何故この脚本を選んだのですか？

A. いつもコメディを上演しているのですが、今回の劇ではシリアスで難しい要素がいっぱいですがチャレンジしようと思い選びました。元々70分劇ですが60分にするためにセリフを切り、自然に組み合わせることが大変でした。

Q2. 昔風の舞台装置はどうやって用意したのですか？

A. 私達の学校はよく家のセットを建てているので色を変えて再利用しました。あと先生が私物の家具やふすま等を貸してくださいました。鉛筆の芯やチョークで昔っぽくしました。

Q3. 広島弁はどうやって習得したのですか？

A. 広島弁の朗読CDを何回も聞き、練習しました。名古屋弁が出てしまったり、アドリブをする時に広島弁でどう言ったらいいか分からなかったので大変でした。

Q4. 原爆を表現するために工夫した点や苦労した点がありますか？

A. この作品を上演するにあたって、何を伝えたいか考えたときに『一寸法師』の鬼に対する気持ちと広島の人々の原爆に対する怒りが同じではないのかと思い、特に怒りの表現を工夫しました。



【速報担当】 齊藤まど佳 安野心詞 (羽水)

※ 名古屋市立緑高等学校のみなさん お疲れ様でした！！